発行所：公益財団法人 北野生涯教育振興会
ＵＲＬ：http://www.kitanozaidan.or.jp/

生涯教育だより

2018
秋
季刊 No.118

復興支援　被災地の小中学校へアーティストを派遣 …… 2
美術研修「大地の芸術祭を訪ねて」 …… 4
プロフィール・インタビュー …… 12
日本大学 芸術学部 教授　鞍掛 純一さん

いつでも　どこでも　だれでも学べる
公益財団法人 北野生涯教育振興会
KITANO FOUNDATION OF LIFELONG INTEGRATED EDUCATION

復興支援

被災地の小中学校へ 声楽家・メディアアーティストを派遣！

北野財団では、復興支援活動の一環として、被災地の小中学校へプロの声楽家やメディアアーティストを派遣しています。昨年までは2011年3月に発生した東日本大震災の被災地である福島県いわき市と宮城県気仙沼市にアーティストを派遣していましたが、本年度はそれらに加えて2016年4月に熊本地震に見舞われ、甚大な被害を受けた熊本県上益城郡益城町にアーティストを派遣しました。

声楽家派遣

福島県いわき市

6月7日にいわき市立入遠野小学校で声楽家派遣を行いました。山間の空気の澄んださわやかな風が通り抜け、小鳥のさえずりが聞こえてくるとても静かな環境に学校はありました。今回は、ソプラノ荒牧小百合さん、バリトン原田勇雅さん、ピアノ矢野里奈さんの3名で演奏しました。全校児童56名が音楽室で待っている中、はじめに原田さんが「オ　ソーレ　ミオ」を歌うと、その声量に児童だけでなく先生方も圧倒されていました。また荒牧さんのきれいな高い声に感動し、子どもたちは「どうしたらそんな声が出せるのだろう」と不思議がっていました。最後に「さんぽ」を全員合唱し、子どもたちと一緒に楽しく歌いました。

翌6月8日は、全校児童156名が体育館で待つ上遠野小学校で行いました。原田さんの歌う「魔王」では、曲の中に出てくる3人の声が聞き分けられるか、みんな真剣に聴いていました。「パパの二重奏」では、荒牧さんと原田さんが児童たちの中を通り抜けながら歌い、子供たちも楽しんで聴いていました。最後に「ひまわりの約束」を全員で歌いました。児童代表から感謝の言葉をいただき、校長先生からも「プロの歌を間近で聴くことができて大変感動した」との言葉をいただきました。

入遠野小学校での全員合唱「さんぽ」

「パパの二重奏」を歌う荒牧さんと原田さん

宮城県気仙沼市

9月7日は、気仙沼市立小泉小学校で声楽家派遣を行いました。

ソプラノ鵜木絵里さん、バリトン青山　貴さん、ピアノ矢野里奈さんの3名で9曲を演奏しました。児童に語りかけるように曲紹介や歌の内容を説明されました。また、青山さんが「闘牛士の歌」を児童の列の中に入りながら歌い、一番の盛り上がりを見せていました。一曲目が終わった時点でピアノの鍵盤の一つが上がらないというハプニングがありましたが、調律師がピアノを開けて5、6分で直してくださり、無事に続けることができました。好奇心旺盛な児童たちは、ピアノ内部を見ることができて大喜びでした。最後の全員合唱では、「遠くを見て歌う」「大切な人や友達の事を思って歌う」などの指導があり、その後は一段と上手に歌えるようになりました。児童たちは、9月15日の「TBC子供音楽コンクール宮城大会」にエントリーしており、プログラム終了後も早速、合唱練習をしていました。

小学校周辺では、復興工事が行われており、大きく高い護岸壁が出来つつあります。また、道路も高い位置に敷設しており陸橋などが作られています。復興は道半ばのようですが、着実に進んでいました。

静かに聞き入る児童たち

青山さんと一緒に楽しく歌う児童

熊本県上益城郡益城町

9月21日、まず訪れたのは広安小学校です。5年生約105名が音楽室に集まりました。始める前から歌を口ずさむ元気のよい子どもたちでしたが、ソプラノ荒牧小百合さん、テノール土崎譲さんの演奏が始まると全員じっと静かに聞き入り、サウンドオブミュージックでは一緒に歌うなど、とても楽しんでいる様子でした。また、津島圭佑さんの素晴らしいピアノ演奏を目の当たりにして、目を丸くして驚いていました。校長先生はじめ先生方も感動してくださり、ぜひまたお願いしたいとおっしゃっておられました。

児童を前に素晴らしい歌声を披露

次に訪れたのは木山中学校です。校舎をつなぐ渡り廊下が地震によって崩落してしまい、一つは先月完成したものの、もう一つは建設中でした。こちらの学校では近々、合唱コンクールが開催されるとのことで昼休みには、各クラスで熱心に合唱練習をしていました。体育館で全校生徒を対象に開催された演奏会では、素晴らしい歌声とピアノ演奏に真剣に耳を傾けていました。また全員合唱「旅立ちの日に」は、とても気持ちがこもっており、声も出ていて鳥肌が立つほど感動しました。校長先生も「こんなに上手く歌えるとは」と、驚いていらっしゃいました。

全員合唱「旅立ちの日に」を披露する生徒たち

木山中学校　生徒感想

生徒から感想をいただきましたので一部抜粋して掲載します。

■復興支援という事で「花は咲く」「旅立ちの日に」を歌ってくださり本当に勇気をもらいました。合唱の練習、日々の生活、復興へ向けての活動、それらをするとき何か辛いことや目標を見失った時は、東京からわざわざ来てくださった方々の演奏や歌を思い出し、自分たちには応援してくださる方がいるということを常に忘れず、心の支えにしていきたいと思います。

■「すごい！」の言葉しかでません。私は歌が好きなので、あの素晴らしい声はどこから出ているのだろうと不思議に思い、興味津々で聴いていました。お忙しい中、私たちのために素晴らしい歌・ピアノを披露していただき感謝の気持ちでいっぱいです。

■みんなで歌った「旅立ちの日に」が心に残っています。合唱コンクール前ということもあり、学校全体が一つの絆で結ばれた感じがしました。

どちらの学校も仮設住宅から通っている生徒が多くおり、復興にはまだ時間が掛かるようですが、復興に向けて一歩ずつ前進している明るく元気な姿が印象的でした。

メディアアーティスト派遣

当財団では、小中学生のためのワークショップ「手書きのおどろき盤とデジタルカメラを使ってプラクシノスコープを作ろう！」を実施しています。映像装置の起源となる2つの装置を制作することで、過去のテクノロジーがいかに現在に繋がっているかを体験しながら学びます。

■おどろき盤（フェナキスチスコープ）は、1830年代に発明された古い装置。型紙の円盤に順を追って絵を書き込み、回転させ鏡に映し、スリットから鏡を見ることで、電気も使わないアニメーション装置を完成させます。使い方などを考える時間を与え、工夫やアイディアが詰まった装置であることを体感します。

訪問先の学校では、子どもたちは「すごい！」「おどろいた！」と感嘆の声をあげて、過去に発明された映像装置を自ら作り、鑑賞して楽しんでいました。子どもたちがこのワークショップを通して、少しでも美術や映像、科学の面白さ、楽しさ、奥深さを感じて興味を持ってくれたら良いと思っています。

■プラクシノスコープは、おどろき盤のあとに発明されました。デジタルカメラとプリンターを使うことで、絵の巧さではなく、アイディアの面白さや計画のたて方、指示の出し方、そして映像の原理を楽しみながら学ぶことができます。

ワークショップ実施校

2018年9月7日
益城町立津森小学校

おどろき盤制作に取り組む子ども達

2018年9月7日
益城町立津森小学校

おどろき盤の説明をする橋本講師

2018年7月18日
気仙沼市立階上小学校

写真上手く撮れてるかな

2018年7月6日
いわき市立田人小中学校

校長先生も興味深々

講師：橋本典久さん　アーティスト
明治大学総合数理学部特任講師　武蔵野美術大学映像学科非常勤講師

いわき市、気仙沼市、益城町へは図書寄贈も行っており、これら財団の活動が子どもたちに、本物に触れるよろこびや感動、発想力・ひらめき、また豊かな人間性そして確かな学力が育まれることを願って、これからも様々な支援活動を行っていきます。

財団のあゆみ 118

「美術鑑賞」（その57）

2018年8月23日㈭～24日㈮

大地の芸術祭をたずねて
―越後妻有（えちごつまり）アートトリエンナーレ2018

日本有数の豪雪地、越後妻有（新潟県十日町・津南町）を舞台に、3年に一度開催されている世界最大級の国際芸術祭を2日間にわたって鑑賞しました。農業を通して大地とかかわってきた歴史・文化を持ち、日本の原風景とも言うべき豊かな「里山」が残るこの地を、アートを道しるべに巡りました。

1

2

3

4

5

6

7

8

9

■越後妻有は、かつての行政区分「越後国」と古い文献に見られるこの地方を指す「妻有庄」からとられた通称。これ以上進めない場所を指す「とどのつまり」が語源ともいわれている。

大地の芸術祭は東京23区ほどの広さを持つ越後妻有を舞台に、2000年、100点余りの作品からスタートしました。恒久的に展示される作品もありますが、会期ごとに新作も発表され、7回目の今回は378点の作品が公開されています。44の国と地域から参加の335組のアーティストの多くは、実際にこの地を訪れ、現場で制作しています。

私たちの2日間は、話題の新作を中心に、人気の高い過去の作品を、棚田をはじめとする大自然の美しさとともに堪能しました。空家や廃校に展示されている、いわゆるホワイトキューブ（ギャラリーや美術館）では見ることの難しい作品を鑑賞しました。

移動のバスの中で、
沼辺先生と鞍掛先生に
お話しいただきました。
（以下Nは沼辺先生、Kは鞍掛先生）

N どうして家を彫ってみようと思われたのですか。

K 地域には人の住まなくなった家がたくさんありました。住まなくても雪下ろしをしないと家はつぶれてしまいます。この廃屋を使って何かしたい。一人でするのではなく、学生たちも巻き込んで、多くの人が携わって、地域とコミュニケーションをとりながらできることは何だろうかと考えました。

N 「脱皮する家」というタイトルは最初から決めていましたか。

K いいえ。プランの段階では「家を彫る」で出していました。彫ることによってたくさんの人が来て、新しく生まれ変わる。彫り手の僕たちも、家も、まさに脱皮している感じでしたので、いくつかの案の中から「脱皮する家」となりました。

N 家の中全てを彫りあげる、大変な仕事量ですね。

K あまり苦労したとか見せたくないのですが、本当に大変でした。とても彫れるような家ではなく、半年間の片付けに始まり、基礎もやり直しました。学生たちとほとんど毎週末通っておよそ2年間彫り続け、会期初日朝にようやく彫りあがりました。

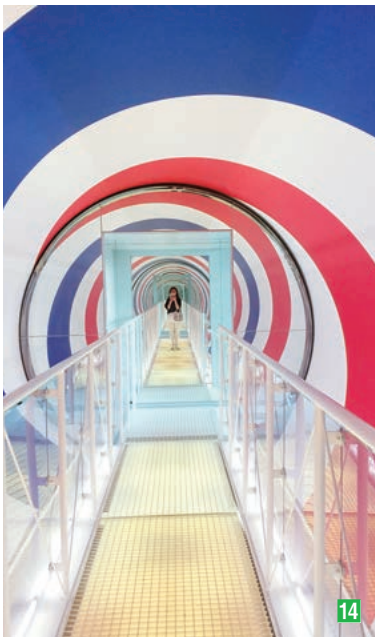
N 削り取っているようでいながら、苦労を刻み込んだという感じですね。

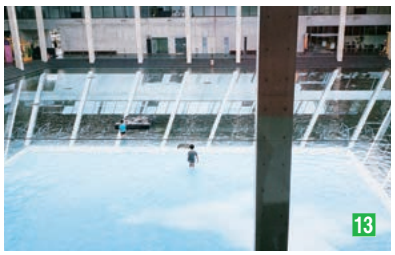
K 時も刻み込みました。初めは地域の人に距離をおかれました。東京から来た変な若者たちが何故か家を彫っていると。挨拶をかわしたり、お手伝いをしたりするうちにお母さんたちがご飯を作ってきてくれるようになって、今ではあたたかく迎えいれてもらっています。

N 暮らしたことはないですけれど、古い日本の家にいるとほっとしますね。「脱皮する家」は本当に素晴らしいお仕事でした。お疲れ様でした。

K 生きて暮らしている生活の場に美術（アート）が下りてくる感覚を大切にしたいです。アートをやりながら棚田も作り続けていくつもりです。トリエンナーレ以外の期間も見学できます。これから秋の棚田もいいですよ。

鞍掛純一＋日本大学芸術学部彫刻コース有志《脱皮する家》2006年　述べ3千人によって、壁や床、柱などが彫刻刀で彫られ、一棟丸ごとが作品となった。





1奴奈川キャンパス　廃校を活用して地域の生活を学ぶユニークな学校。キャンパス内外には作品も展示されている。 2鞍掛純一《はなしるべ》2018年　3 4マ・ヤンソン／MADアーキテクツ《ライトケーブ》2018年　観光名所「清津峡」トンネルの絶景を望む見晴所の作品。清津峡の景観を反転して映す『水盤鏡』の幻想的な眺めが大人気！　5金氏徹平《SF Summer Fiction》2018年　6星峠の棚田　7草間彌生《花咲ける妻有》2003年　8イリヤ＆エミリア・カバコフ《棚田》2000年　稲作の情景を詠んだテキストと、対岸の棚田に農作業する人々の彫刻を配置した、詩と風景と彫刻が融合した作品。 9ジミー・リャオ（幾米）《Kiss&Goodbye》2015年　台湾のベストセラー絵本作家がJR飯山線を舞台に制作した絵本『幸せのきっぷ』から展開した作品。 10鉢＆田島征三 絵本と木の実の美術館　2009年～　130年の歴史に幕を下ろした真田小学校を作家田島征三による「空間絵本」として再生した美術館。最後の在校生3人を主人公に、奇想天外な物語が展開する絵本「学校は終わらない」の世界を表現している。 11須佐美彩《考えない》2018年　12 13レアンドロ・エルリッヒ《Palimpsest》2018年　建物中央にある回廊に囲まれた大きな池は、2階から見ると建物の鏡像が複層化している不思議な現象に気づく。 14カールステン・ヘラー《Rolling Cylinder,2012》

初日はミシュラン星付きシェフ監修によるスペシャルランチに舌鼓をうち、2日目は、お米のあれこれを「ザおこめショー」で学んで、お気に入りのおにぎりと旬の食材をふんだんに使った惣菜を味わうなど、地域の食文化も体験できました。

また、美術研修を23年間に亘って講師として支えてくださっている美術研究家の沼辺信一先生と、大地の芸術祭で多くの話題作を手がけておられる日本大学芸術学部教授の鞍掛純一先生の、お二人によるお話は、今回の研修のもうひとつのハイライトともいうべきものでした。

（コラム参照、鞍掛先生のプロフィールインタビューは12頁）

デジタル一眼レフカメラ入門（その5）

2018年9月4日㈫～5日㈬

今年で5回目となる講座は例年の鎌倉から所を変え、湯河原・熱海にて開催されました。
台風21号が猛威を振るうさなかでしたが雨の影響も少なく、講義と撮影実習、作品鑑賞と作品講評、懇親夕食会をほぼ予定通りに行うことができました。
講師には日本大学芸術学部写真学科講師 穴吹有希先生をお迎えし、
同学科4年生の高野楓菜さん、前島二葉さん、山口頌子さんがお手伝いをしてくれました。

撮った写真を削除してはいけません！

写真を長く撮り続けていくと、撮るのも面白いし、選ぶのも楽しみの一つになっていきます。選ぶためには、全ての写真は消さずに保存してください。後で見返すと、その時には気付かなかったことを失敗作からたくさん学ぶことができます。

いい写真ってなんでしょうか？

型にはまった、いわゆる仕事で使うような写真はちょっと訓練すればすぐに撮れるようになります。そこからいかに抜け出すか、自分らしさをどう出していくかが重要です。

人それぞれ視点や興味の対象も違いますが、楽しみつつ、自分を見つめ直しつつ、写真を撮り続けてください。撮って保存しておけば、記録、記憶として残っていきます。そして見返してみる。これをずっと続けていってください。

また来年

一年間で今回の講座でのことをマスターして、カメラを使いこなしている皆さんにお会いするのを楽しみにしています。

（穴吹先生の講義より）

ワンポイントアドバイス

いい写真≒直感、いい写真≒独自の視点

自分の思いのままに撮ってほしいと思います。基本の構図より自分の直感で撮ってみてください。何気なく構えた場所から5センチカメラの位置を下げる。いつもより一歩近寄って撮ってみるなどの、ちょっとした工夫でいつもの写真がより魅力的になることがあります。ご自身の独自の視点を探してみてください。

1. カメラを構える高さをかえてみる
2. 水面やガラスなどの反射を生かす
3. 影をとらえて、シルエットの面白さを主題にする
4. ピントの位置を主題からずらしてみる
5. 極端に見上げたり見下ろしたりして遠近感を強調する

写真展「わたしの見つけた瞬間」vol.5

10月22日㈪～31日㈬
於中目黒GTギャラリー

誌上写真展

第8回

50代から考える 夫婦のライフプラン講座を開催

2018.6.23㈯

第6回から、日帰りセミナーとして開催して今回で3回目となります。今回もより多くのご夫婦の方に参加していただくことを目的として参加年齢を引下げて、「50代から考える夫婦のライフプラン」として渋谷エクセルホテル東急においてセミナーを開催いたしました。

基調講演をされる
井上講師

「年金に関する基礎知識」を
解説される大橋講師

熱心に講義を受ける参加者

人生100年時代に向け ライフプランを作成

「人生100年時代」と叫ばれる今日、『ライフ・シフト』の著者リンダ・グラットン氏によれば、今後は100年生きる前提での人生設計が必要であると言われており、特にマルチステージとリカレント教育の理解が重要になります。

夫婦単位を原則として、夫婦いずれかが49歳から63歳までの方々8組、14名が参加しました。初めは緊張していた参加者も講師の方々の和やかな雰囲気の中での講義に、次第にリラックスされていきました。内容は、定年後のお金の計算を基に専門の講師の指導を受けて夫婦でライフプランの作成に取り組み、定年後の生活設計を具体的にイメージしてもらうものです。

講師は、㈱活性化セミナー研究所代表の井上国春氏ら2名です。はじめに同社ライフプランコンサルタントの井上講師による基調講演「働きざかりをいきいきと」と題して、生きがいに関わる4つの心配事についての講演がありました。次に大橋講師が「年金に関する基礎知識」について解説されました。

豊かな老後に 必要な事前準備

昼食後は、60歳～80歳までの20年間の長期家計プラン作成の説明がありました。その後は、「100歳人生を目指して」と題して、「マルチステージ」と「リカレント教育」について説明をいただきました。さらには、わが家のライフプランとして、夫婦で一枚、生活の長期計画を相談し合いながら策定していただきました。それを基にライフプラン「知恵の交換会」と題して、2グループに分かれ参加者全員によるそれぞれの長期家計プランについて自由に討議を行い、お互いの情報共有化を行いました。他の方の考え方を聞くことによって、参考になる部分を積極的に取り入れることも大切であるとの説明がありました。

講義やグループ討議を経て、参加者には「健康・お金・時間・生きがい」などについて真剣に考え、豊かな老後を送ることができるように事前準備の必要性を感じていただきました。作成したプランも年に1回見直しメンテナンスすることで、より良いものになるとのアドバイスをいただきました。参加者は、事前準備も含めてライフプランセミナーを積極的に受講されているのが大変印象的でした。また、参加者からは「講師の先生方の説明が大変に分かりやすく良かった」、「勉強になった」という多数のアンケート回答をいただき、ライフプランセミナー開催の意義を感じています。

グループ討議
「知恵の交換会」

外国人奨学生奨学金授与式

当財団では、成績優秀であるにもかかわらず、残念ながら経済的に恵まれていない学生に、学習の機会を与え、日本との友好関係を築く礎になれば、との想いから外国人奨学生制度を行っています。1999年中国天津の南開大学から始まったこの制度は、現在では中国の広州、ベトナムのハノイ、インドネシアのソロ、フィリピンのミンダナオに展開しています。

4月26日に行われた天津大学での授与式では、学工部副部長 馬徳剛先生、学工部 劉東先生ご出席のもと10名の奨学生へ。また南開大学では経済学院党委副書記・副院長 高琪先生、党委学生工作部 高世哲先生ご出席のもと奨学生10名に向けて、天津スタンレー有限公司の藤井雅之総経理を通じ、証書を手渡しました。奨学生たちはそれぞれ奨学生になったよろこびと今後の抱負を熱く語りました。

また、8月24日インドネシアPOLINES大学入学式当日に行われた授与式では、インドネシアスタンレーの小川社長挨拶のあと、20名の奨学生一人ひとりへ証書が手渡され、出席した多くの学生から温かい拍手が送られました。

抱負を語る天津大学奨学生のみなさん

南開大学奨学生と関係者のみなさん

小川社長から証書を授与される奨学生

POLINES 大学奨学生のみなさん

関係者と学生のみなさん

生産性の船1号船 成果報告会

当財団では、公益財団法人 日本生産性本部が主催する洋上研修「生産性の船」に勤労者を派遣し、その派遣費用を助成しています。7月14日㈯～22日㈰までの9日間の研修を終えた5名による「成果報告会」を、8月3日㈮財団ホールで開催しました。参加者はそれぞれ、研修で学んだことや意識の変化、今後の仕事への意気込みなどを熱く語りました。この研修がこれからの人生に活かされることでしょう。

研修の成果を発表するみなさん

左から叶麻里（北野財団）、松本俊史さん（目黒区役所）、小宮山マージッドさん（笛吹市役所）、石切山達也さん（南部化成）、菅谷勝己さん（長田電材工業）、市橋淳平常務理事

MCL（ミンダナオ子ども図書館）日本公演

当財団が保育所の建設支援等を行っているMCL（ミンダナオ子ども図書館）の若者たちによる日本公演が、4月から6月にかけて全国各地のコミュニティーセンターや学校、教会等で行われました。6月1日㈮に港区立生涯学習センターで行われた公演（『平和を作る子どもたち』: 港ユネスコ協会主催）では、当財団の奨学生3名を含む9名の若者たちとスタッフが、この日のために一生懸命練習したミンダナオの伝統的な歌と踊りを披露しました。また、この公演の模様はテレビでも紹介され大きな反響を呼びました。当財団はこれからもMCLへの支援を続けていきます。

伝統舞踊を踊る若者たち

リズムに合わせてバンブーダンス

笑顔がとても素敵な奨学生のみなさん

MCL（ミンダナオ子ども図書館）へ支援物資を送付

毎年恒例となっている、MCL（ミンダナオ子ども図書館）への支援物資の寄付も、今年で8年目となりました。みなさんからの善意のおかげで、衣料品やおもちゃ、タオル、シーツ、リュックサック、運動靴など、今年も多くの物資が集まりました。クリスマスに間に合うように子どもたちへ贈ります。ミンダナオの子どもたちに明るい笑い声と笑顔が溢れることでしょう。

みなさんの想いが詰まったクリスマスプレゼント

ミンダナオの子どもたち

子どものためのダンス・演劇ワークショップへの協賛

当財団では、公益財団法人 目黒区芸術文化振興財団が行っている、子どものための「ダンスワークショップ」「演劇ワークショップ」（パレットプログラム）へ協賛しています。夏休みの数日間、ダンスや演劇未経験の子どもたちが、振付家や演出家の指導を受けながらみんなで楽しくからだを動かし、自分のからだで表現するよろこびやむずかしさを学び、そして仲間たちと一緒に「めぐろパーシモン小ホール」での発表会に挑みました。子どもたちは一生懸命練習したダンスや演劇を披露し、学校の授業では味わうことのできない素晴らしい特別な時間を楽しみました。

力を合わせてからだで表現

みんなで楽しくダンス

笑顔いっぱいの子どもたちと振付家

財団ニュース

ご報告

第40回懸賞論文「私の平成」入賞者が決定

今年も恒例の懸賞論文の公募が行われました。今回のテーマは「私の平成」です。厳正な審査の結果、入賞者は左記の方々に決まりました。

賞	作品名	氏名	居住地
1席	かけがえのない毎日	黒沢　賢一	福島県いわき市
2席	出会いと感謝	上之段　美保	香川県高松市
	心の風景	宮尾　美明	愛知県愛西市
3席	転がる石	梅田　純子	新潟県三条市
	女性の輝く社会	上床　華世	東京都板橋区
	息子と共に前を向く	大野　里恵	愛媛県松山市
	葛藤・不安から飛躍へ	西岡　奈緒子	神奈川県藤沢市
	帰ってくるウルトラマン	劉　霊司馬	東京都文京区
佳作	ほどけた絆を結いなおし	大宮　さつき	千葉県柏市
	行動から生まれる絆	沖野　大輔	東京都狛江市
	つながる二つの震災の記憶	川﨑　雅子	兵庫県神戸市
	「平成」と「社会経験」と「私」	高橋　克己	東京都大田区
	平成をおもう	常盤　眞弓	愛媛県松山市
	成熟国家への模索	宮本　倫好	東京都府中市
推薦	コウモリとして生きる	後藤　貴子	秋田県横手市
	平成とわたし	齋藤　恒義	兵庫県加西市

北野財団混声合唱団結団式開催

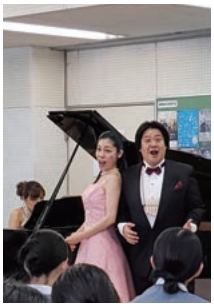
当財団では、6年間にわたりフォーレ「レクイエム」、創作オペラ「ヤマタノオロチ」の合唱に取り組んできましたが、このたび「北野財団混声合唱団」として名称も新たに出発することになり、その結団式が10月10日中目黒GTプラザホールで開催されました。公募で集まった合唱団メンバーのうち約50名出席のもと、合唱指導の荒牧小百合先生、竹内雅挙先生、ピアノ伴奏の矢野里奈先生のご紹介のあと、作曲家で東京藝術大学演奏芸術センター助教・山田香先生が「合唱人のための楽典等」と題して講演をされました。音程や度数、音階、和音、拍子についてお話され「これを知って歌うのと、知らないで歌うのでは全然ちがいます」という言葉に、団員のみなさんはメモを取りながら熱心に聴いていました。

コンサートは3月10日めぐろパーシモン小ホールで開催されます。

講演する山田 香氏

アウトリーチプログラムへの協賛

当財団では、公益財団法人 目黒区芸術文化振興財団が主催している「アウトリーチプログラム」に協賛しています。この事業は、目黒区内の小中学校にプロのアーティスト（声楽家、ピアニスト）を派遣し、生の演奏を観て・聴いて、感じて、芸術文化に触れて一緒に楽しむことを目的としています。素晴らしい演奏に、生徒たちは目を輝かせて聴き入っていました。


目黒区立第八中学校で演奏するみなさん

2018年度 生涯教育研究助成金対象者が決定

今年度も生涯教育研究助成金の公募が行われ、生涯教育に関する調査・研究をする多くの方々の中から、研究助成金選考委員会による厳正な審査の結果、対象者が決定いたしました。今後の研究が大きな成果に繋がることでしょう。

堀内成子　聖路加国際大学 教授
洞口治夫　法政大学 教授
斉本美津子　浜松医科大学 助教授
西原陽子　立命館大学 准教授
戸ヶ里泰典　放送大学 教授
能見清子　創価大学 講師
河越正明　日本大学 教授
木山幸子　東北大学大学院 准教授

お知らせ

講演会 舞台芸術「バレエ」に親しむ ～初めてのバレエ鑑賞「ザ・カブキ」～

バレエ鑑賞初心者向けの講演会と東京バレエ団「ザ・カブキ」の鑑賞。

日　程
第1回　2018年12月8日(土)
中目黒GTプラザホール
講演「バレエの楽しみ方」
東京バレエ団 岩永智博氏
ダンサー2名
第2回　2018年12月16日(日)
東京文化会館
バレエ鑑賞　東京バレエ団
モーリス・ベジャール振付
「ザ・カブキ」

定　員　70名

©Kiyonori Hasegawa
「ザ・カブキ」の一場面

美術研修（その58）
伊豆の美術館を訪ねて

早春の伊豆を訪れ、新旧のアートを楽しみます。訪問先はMOA美術館、江之浦測候所他を予定しています。

日程　2019年春
講師　沼辺　信一氏
定員　40名

江之浦測候所

歴史研修（その10）
伊予の城めぐり

日本100名城のひとつ、現存する天守をはじめ多くの重要文化財を持つ松山城、桜の名所である湯築城跡、草木と苔むした石垣が美しい海城 宇和島城、肱川の水面に姿を映す大洲城を、歴史研究家 小和田哲男氏と共に巡ります。

日程　2019年3月28日(木)～29日(金)
講師　小和田　哲男氏
定員　40名

宇和島城

第46期 主要行事のご案内

2018年

10月
- 理事会
- ベトナム（国立農業大学）奨学金授与式

11月
- 評議員会・理事会
- 研究助成金授与式
- 懸賞論文入賞者表彰式
- 論文集「私の平成」発刊
- 生産性の船2号船 成果報告会
- 中国（広東工業大学）奨学金授与式

12月
- 講演会 舞台芸術「バレエ」に親しむ

2019年

2月
- 懸賞論文公募

3月
- 彫刻奨学生作品設置（山梨県笛吹市）
- 北野財団混声合唱団コンサート
- 科目等履修奨学生・放送大学大学院修士全科奨学生奨学金授与式および成果発表会
- 美術研修（熱海方面）
- 歴史研修（伊予の城めぐり）
- 中国（南開大学・天津大学）奨学金授与式

4月
- 研究助成金公募
- 洋上研修公募

5月
- 科目等履修生および放送大学生（選科履修生・大学院修士全科生）奨学生選考会

6月
- 「ミンダナオ子ども図書館」大学生奨学金授与式
- ライフプランセミナー
- 彫刻奨学生奨学金授与式
- 講演会 伝統文化「能」に親しむ

7月
- 懸賞論文審査委員会
- 研究助成金選考委員会
- 伝承研修

8月
- インドネシア（POLINES大学）奨学金授与式
- 生産性の船1号船 成果報告会

9月
- デジタル一眼レフカメラ入門
- 美術研修
- ベトナム（ズンサ高校・フンイェン財務経営管理大学）奨学金授与式
- 「ミンダナオ子ども図書館」保育所開所式

※講師等の都合により、スケジュール等変更の場合もあります。

こ●ち●ら●編集室

朝晩すっかり秋めいてきました。里山では紅葉がそろそろ見頃を迎えます。清々しい青空と赤や黄、橙といった燃えるような木々の色は、誰しも魅了されるのではないでしょうか。財団では桜の季節に合わせて歴史研修「城めぐり」を行っており、「城と桜」の織りなす姿は、それは美しいものですが、秋の「城と紅葉」もまた素晴らしく、ライトアップされた姿は「天守炎上」と言われる絶景です。また、わざわざ遠くへ行かなくても、近くの公園や街路樹に素敵な秋があるかもしれません。少し歩いて探してみてはいかがでしょうか。

設立のねらい

当財団は、スタンレー電気株式会社の創業者北野隆春の私財提供により、生涯教育の振興をはかる目的で1975年6月23日、文部省（現文部科学省）の認可を得て発足し、2010年12月1日に公益財団法人となりました。当財団は、いつでもどこでもだれでも学べる機会をつくり、学ぼうとする方々に対し、より豊かな生きがいを持てるよう、時代が求める諸事業を展開してまいります。

生涯教育だより　第118号

2018年11月10日発行
編集人　市橋　淳平
発行人　北野　重子
発行所　公益財団法人　北野生涯教育振興会
〒153-0053　東京都目黒区五本木1丁目12番16号
電話　東京　03（3711）1111

表紙ギャラリー

北里 柴三郎（1853～1931）

北里柴三郎は、1853年1月に現在の熊本県阿蘇郡小国町の庄屋の家に生まれました。熊本医学校（現熊本大学医学部）から東京医学校（現東京大学医学部）へ進学し、「医者の使命は病気を予防することにある」と予防医学を生涯の仕事とすることを決意します。卒業後、内務省衛生局へ入局し、ドイツベルリン大学へ留学。病原微生物学研究の第一人者コッホに師事し研究に励みました。1889年、世界で初めて破傷風菌の純粋培養に成功し、翌年には破傷風菌抗毒素を発見。さらに世界で初めて血清療法を確立しました。その血清療法をジフテリアに応用し、同僚のベーリングと共に論文を発表。これらの功績により研究者としての名声を博します。帰国後、福澤諭吉の援助により私立伝染病研究所（現東京大学医科学研究所）を設立。初代所長となり伝染病予防と細菌学の研究に取り組みます。1894年にはペストが蔓延していた香港に、政府より派遣され、病原菌であるペスト菌を発見するという業績を上げました。1914年、伝染病研究所が内務省から文部省に移管されたため、所長を辞任し、私費で私立北里研究所（北里大学の前身）を設立。狂犬病、インフルエンザ、赤痢、発疹チフスなどの血清開発に取り組みました。福沢諭吉没後、その恩義に報いるため慶應義塾大学医学部を創設し医学部長、附属病院長となり、生涯無給で慶応義塾大学医学部のために尽力しました。1923年には日本医師会を設立し、初代会長として運営にあたりました。

写真提供：学校法人 北里研究所

プロフィール・インタビュー

日本大学 芸術学部
教授
鞍掛 純一さん
JUNICHI KURAKAKE

芸術は、生活をより心楽しいものにするためにある

当財団の彫刻奨学生だった鞍掛先生は、大学で彫刻を教える傍ら、新潟県の「越後妻有 大地の芸術祭」にも参加するなど、多彩に活動しています。制作にかける思いと、芸術に向き合う姿勢についてお聞きしました。

2006年発表の「脱皮する家」

――鞍掛先生が彫刻の道に進んだ経緯をお聞かせください。

私の父は画家で、生計を立てるために学校の先生もしていました。「自分で責任を取れないことはするべきではない」という考えから、スポーツなら個人競技をしなさい、サラリーマンにはなるな、などと言われました。私は集団で行動するのが好きでしたので違和感がありましたが、父にはよく美術館に連れて行ってもらいましたので、芸術にも興味を持っていました。大学へ進む時は、プロとして続けていくという条件を与えられ、日大に進学。その後、北野生涯教育振興会の「彫刻奨学生奨学金」の1990年度奨学生になります。

彫刻の道を決定づけたのは、当時日大の教授だった土谷武先生の作品「歩く鉄」に心を打たれたことです。何枚も重なった鉄板が文字通り歩いているような、抽象的ながら引き込まれる作品。私は先生のレベルに少しでも近づくため、デッサンに一日中没頭するようになったのです。

――制作活動にはどのような姿勢で取り組んできましたか？

自分でテーマを決めて作るようになったのは3年生からです。しかし当時の私は「独自性」より「普遍性」を追求していました。土谷先生に追いつくために、まずあらゆる素材の使い方、彫刻の技術といった全般的な基礎をマスターしなくてはならないと思っていたのです。また、4年生から研究2年までの3年間、日大元教授で彫刻家の柳原義達先生のご自宅にお手伝いとして下宿。戦後の具象彫刻を代表する柳原先生からも多くのことを教わり、猛勉強する毎日でした。

「もっと自由にやってもいいのではないか」。そう思えるようになったのは、柳原先生のヨーロッパ旅行に同行してからです。日本にとって彫刻の輸入元であるヨーロッパは、言わば彫刻の故郷。その素朴で大らかな空気に触れたことで、少し楽になれたのかもしれません。

その後も日大に勤める傍らで制作を続け、2006年、新潟県で3年に一度開催される「大地の芸術祭」で「脱皮する家」を発表。多くの日大生有志と汗を流して制作に取り組んだ経験を通して、芸術は肩肘張って向き合わなくていい、ご飯を美味しいと感じるように素直に楽しめばいいと思えるようになりました。

――現在は学生を指導する立場ですが、教える上で大切にしていることは何ですか？

芸術にのびのびと取り組むのは小学生までで、多くの人は中学高校の間に何らかの制約に縛られてしまいます。もちろん、作品を通して何かを伝えるためにはそれなりの技術を身につける必要があります。大学がその重要な場であるのは言うまでもありません。しかし私は、芸術は生活に根ざしたもので、もっとやりたいようにやっていいと思っています。

「脱皮する家」や、同じく「大地の芸術祭」で発表した「はなしるべ」は、実は彫刻なのか何なのかわからない作品です。しかし私は、それでいいと思っています。普段の暮らしをより心楽しいものにしようとするところに、芸術はあります。学生たちにはそうした感覚を身につけてもらいたいですね。

「大地の芸術祭2018」で「奴奈川キャンパス」内に設置された「はなしるべ」

――今後の制作の抱負をお聞かせください。

東日本大震災以降、日本の地域社会の風景は当たり前のものではなくなりました。そのような認識を持ちながら、「大地の芸術祭」を通した越後妻有の活性化に取り組んでいきたいです。特に今後は、地域の自然や生態系を守ることも視野にいれて制作していきたいと思っています。

そのためには、地元住民の方々と協力しなくてはなりませんが、私は色んな人と関わりながら物事に取り組むのが嫌いではありません。やっぱり、父と違って個人競技向きではないんですね（笑）。

自然と、そこに住む人々も幸せになれる未来を、作品を通して実現していきたいと思います。

鞍掛先生は、とても気さくでお話好きな方です。「芸術は、ご飯を美味しいと感じるように素直に楽しめばいい」とのお考えには、先生の人柄がそのまま表れているようでした。学生の皆さんや越後妻有の方々とも、その明るさで楽しく制作をしていらっしゃることでしょう。次回の「大地の芸術祭」がとても楽しみです。